

精神分裂病における知覚変容と妄想知覚

岩井 圭司

Keiji Iwai: Visual Perception Metamorphosis and
Delusional Perception in Schizophrenia

精神神経学雑誌第95巻第3号別刷

平成5年3月25日発行

PSYCHIATRIA ET NEUROLOGIA JAPONICA

Annus 95, Numerus 3, 1993

精神分裂病における知覚変容と妄想知覚

岩 井 圭 司

Keiji Iwai: Visual Perception Metamorphosis and
Delusional Perception in Schizophrenia

I. はじめに

本誌94巻7号掲載の山田らの論考(山田幸彦, 五味淵満徳: 精神分裂症における知覚変容の現象学的研究. 精神経誌, 94; 625-647 (1992))は, 視知覚変容という従来顧みられることが少なかった症候を取り上げて, 現象学的アプローチと知覚心理学・認知科学の成果とを結合させた労作である。筆者はかねてより, 山口ら^{15,16,17)}のいう知覚変容発作を通して, (視)知覚変容に関心を抱いてきた者である。看過されがちなこの現象に正面から取り組まれたことに敬意を表したい。

しかし, 筆者の立場からすると, 山田らの論考には一部概念上, 方法論上の若干の疑義がある。本稿の主たる論点は, はたして山田らのいうように

- ・(視)知覚変容は妄想知覚である
- ・視知覚変容は, 聴覚領域の幻聴に対応する視覚領域の体験である

と心得るのか, という2点にある。この問題意識に基づいて, 山田論文の考察 III) 妄想知覚論に向けて i) 文献的考察の部分 (p. 636-638) を中心に検討することにしたい。

もし山田らの真意が, 視知覚変容は妄想知覚そのものであり, かつ, 視知覚変容が幻聴の等価物であるということにあるなら, それらの帰結として, 「妄想知覚は幻聴の等価物である」と結論されることになってしまう。知覚刺激とはまったく独立に生じる幻聴体験が現実を観察される限り, この結論は受け入れ難い。あるいは, この部分で

の山田らの主張の意図がそこにはないとするなら, 「妄想知覚も幻聴もともに知覚の障害としてとらえられる」ということしか意味しないのではないか。

したがって本稿は, 筆者なりに山田らの見解を一部修正することを通して, 山田論文を受容し評価するための試みである。併せて, 山田らの論じ残した問題を呈示して, 以後の研究の進展に資することを試みたい。

II. 視知覚変容は妄想知覚か

ヤスパース⁷⁾とシュナイダー¹⁴⁾にとって, 妄想知覚とはまずなによりも一次妄想の一形態なのであり, 「動機なき妄想知覚こそ真の妄想」である¹⁴⁾ (邦訳書 p. 69)。そして妄想とは「判断」の病理であるとされる⁷⁾ (邦訳書 p. 63)。ところで, 妄想知覚においては, 「知覚が判断されるというよりは, 直ちに妄想的な意味が付与される」⁷⁾ (邦訳書 p. 67) のであるから, ヤスパースの説くところを理解するためには, 若干の好意的解釈が必要ではある。とはいっても, 「判断」と呼ばれようが「意味が付与される」のであろうが, それはあくまでも妄想としてのものである。つまり, ヤスパースとシュナイダーにおいては, 妄想知覚には当然のこととして妄想の三主徴(確信性, 被影響性の排除, 了解不可能性)が要請されている。従来いわれてきた妄想知覚は, したがって, 知覚の範疇にとどまり得る問題ではない。

一方, 山田らは, 「妄想知覚が知覚における妄

著者所属: 兵庫県立光風病院, Kofu Hospital of Hyogo Prefecture

(現所属: 神戸大学医学部精神科神経科, Department of Psychiatry and Neurology, Kobe University School of Medicine)

想的体験であるとするなら、「体験」の問題を「判断」によって説明することは適切ではない」ので「知覚体験それ自体において問題解決がはかれるべき」(下線部筆者)であるとしている。これはヤスパースとシュナイダーにとっては、やや不当な批判と映るだろう。なぜなら、彼らの主張するところ、妄想知覚において知覚は障害されてはならず、「判断」ないし「意味付与」こそが問題だからである。

山田らは「了解不能に変容した知覚こそが妄想知覚の名にふさわしい」(下線部筆者)として、妄想知覚を“再定義”している。しかし、そうして取り出された現象がヤスパースらのいう妄想知覚と同様の現象であるという検討は、十分になされてはいないと思われる。簡単に「了解不能に変容した知覚」ということなら、幻覚にもあてはまることになる。仮に、山田らが論文のなかで呈示した視知覚変容に限って考えるとしても、それが患者によって妄想知覚として陳述されるに至る“道筋”が症例呈示の中で示される必要があるように思う。妄想知覚における知覚の障害を主張したコンラート²⁾とマトゥセック^{8,9)}は、ヤスパースらのいう妄想知覚と同じ現象について知覚(ないし認知)の歪みが存在することを述べたのである。ここでヤスパースやシュナイダーと異なった現象を取り出してみても、「これこそが妄想知覚である」と主張してみても、妄想知覚論にはならない。「視知覚変容は(従来いわれてきた)妄想知覚とは似て非なるものである」ということにしかならないのである。

もちろん山田らは、彼らのいう視知覚変容と、マトゥセックの妄想知覚との間で共通の病理を見いだしている(「知覚連関の弛緩」「知覚の硬直」)。確かにマトゥセックは、山田らのいう視知覚変容と同じものと考えられる現象(例えば「人々は大変早く、気ばやに働いた」「日の光がまるで違う、大変明るい」「自動車がとてもうるさい」⁸⁾(邦訳書 p. 15-16)から出発して妄想知覚の成立過程を解きあかそうとした。しかし、マトゥセックにあっては視知覚変容それ自体が妄想知覚なのではなく、前者は後者の真部分(ないし前段階)なのである。

ある。

筆者も、視知覚変容と妄想知覚の間には段階的移行があり得るであろうと考えるが、だからといって、両者を同一視することには躊躇する。妄想知覚が視知覚変容から生じるものであるとしても、両者が共通の属性を有しているとしても両者は区別されるべきであると筆者は考える。それはちょうど、トレマからアポフェニーを、妄想気分から発展した妄想知覚を妄想気分から区別し、幻聴と思考吹入とを区別するのと同じ理由による。筆者の経験では、知覚変容は(従来いわれてきたような)妄想知覚には発展しないことの方が多く^{5,17)}、臨床的にも両者を区別した方がより有用であると考えているからである。

ちなみに、コンラート²⁾によるアポフェニー(ないし妄想知覚)の3段階論のうちの段階1を、「明瞭な自己関係づけも特定の意味ももたない純粹の印象体験」(フーバー³⁾)ととるならば、山田らの視知覚変容はここに包含されよう。が、これは勿論、ヤスパース-シュナイダーの文脈では妄想気分の段階である³⁾(邦訳書 p. 37)。

III. 視知覚変容は、聴覚領域の幻聴 に対応する視覚領域の体験であるか

山田らは、彼らの症例の視知覚変容では(ことに視知覚変容を主訴とする症例(症例5)の検討において(山田論文 p. 632)),「(知覚の)自律性(Autonomie)→他律性(Heteronomie)の変化」を認め、山口^{15,16)}の知覚変容発作と同様の現象であるとしている。このことについては、筆者もほぼ同じ見解をもち、山口と共同で「受動的認知態勢」として報告してきた^{4,5)}。

こういった「他律性」「受動性」について、山田らはツットを批判的に継承して次のように述べる:

「(ツットによれば)幻聴における「声が聴こえる」という陳述は、「聞く」のではなく幻声に曝されるということであり、無名的他者に「話しかけられること」(Angesprochen werden)であり(中略)、それに対応する視覚的体験は、従って「見る」こと(blicken)ではなくて無名的他者に

「見られること」(Angeblickt werden) で注察妄想であると分析した。ところで、(中略)聴覚の場合には対象他者の「話す」と、主体の「聞く」との主導権争いが取り上げられ、他方、視覚ではひとつの**blick** (ママ) の争奪の様相が述べられているということである。(中略)それ故、ツットの人間学的分脈に従って正しく言うならば、「聞く」—「話す」関係に対応する視覚領域のそれは、「見る」—「顕わす」(sich zeigen) でなければならない。「顕わす」の圧倒性こそが、幻聴に対応する視覚領域における病的体験と言えよう。この場合、「顕わす」こととは、「話す」が当の対象自身が話すのと同じく、対象が、主体の意図に従ってではなく、それ自身を、己れ自身の様々な属性において自在に顕わすことであり、このことこそマトゥセックが述べた「本質属性の顕現」にほかならず、虚構の対象のまったく新奇な現われ(幻視)とは構造的に異なるものと考えられる。」(下線部筆者)

引用部分が少々長くなったが、この中で筆者が疑問を感じる部分について検討していくことにする。

①「ひとつの blick (ママ) の争奪」と「見る」—「顕わす」(sich zeigen) について

山田らが正しく指摘したように、視知覚変容における知覚の「他律性」ないし筆者ら^{4,5)}のいう「受動的認知態勢」においては、ツット¹⁸⁾のいうようなひとつの“Blick”をめぐっての対象と主体での“争奪”がみられるのではない。そもそも視知覚変容における知覚対象は無生物であることが多く、それらに(妄想的な)人格性が付与されない限り、知覚対象が主体に“Blick”を向けることはない。

山田らは、ツットの「見る」—「見られる」に替わるものとして、「見る」—「顕わす」(sich zeigen) という対を導入する。そして「顕わす」の圧倒性こそが幻聴に対応する視覚領域における病的体験である、と言う。

確かに視知覚変容において、主体は対象に圧倒され屈している。「主体(の眼)が風景を(能動的に見る)」のではなく、「風景が眼に飛び込ん

でくる」ように感じられるのである。ところがこれは、なにも視覚に限った現象ではない。聴覚においても、「風の音を耳を澄まして聞き取る」(筆者ら^{4,5)}のいう能動的認知態勢)に対する「風の音が耳に飛び込んでくる」(同じく受動的認知態勢)という体験が、実際に知覚変容発作にしばしば認められる。知覚変容発作においても視覚性の知覚変容の方が多いし、山田らはもっぱら視知覚変容を対象として考察しているのだが、彼らの症例のなかにもこういった聴覚性の知覚変容の存在が疑われるものがある(例えば症例2の「耳がすぐく聴こえる」)。

「顕わす」に圧倒されることは視覚においてばかりではなく、聴覚領域においても観察される現象なのである。それは「聴覚性の知覚変容」と呼ばれるべきものであっても、幻聴ではない。

視覚において知覚対象が主体に向けて放つものは“Blickではなく”, 実は“Bild (視覚像)”である。視知覚変容においては、この“Bild”の帰属こそが主体と知覚対象の間で争奪されているのである。同様に聴覚においては“Laut”が、知覚(Wahrnehmung)という体験のなかで、主体が能動的に捉え(nehmen)たものなのか、あるいは、知覚対象が発したものが主体に達したのかという帰属を争うのである。

②視覚における能動—受動について

ツットが能動—受動の関係のもとに「聞く」—「話す」に対応するものとして「見る」—「見られる」を(やや粗雑な“言葉遊び”としてとらえられかねないかたちで)取り上げたのに対して、山田らがこれを真摯に批判的に継承して「見る」—「顕わす」(sich zeigen) という対を取りだしたのは、まさに卓見というべきである(なお山田らの“sich zeigen”は(知覚対象が)「現れる」「顕される」「呈示される」等とする方がわかりやすいのではないだろうか)。しかしだからといって、「顕わす」ことの圧倒性が、幻聴に対応する視覚領域における病的体験であるとは考え難いことを前項で述べた。

知覚行為の能動—受動については、もう少し細分化した検討が必要である。筆者ら^{5,6)}は視覚の

[能動]	[受動]
[1] 「見る」 ……………	「見られる」
「眼差す」	「眼差される」(→注察妄想(Zutt)): “Blick” の争奪
[2] (「見せる」) ……………	「見せられる」(→させられ体験(?))
(「呈示する」)	「呈示される」(→幻視(?))
[3] 「見すえる」…「見つめる」…「見る」…「見える」…「目にはいる」…「目に飛び込んでくる」	: “Bild” の帰属の争奪

図 視覚における能動—受動の3軸

能動性—受動性については最低限3つの軸を想定するべきであると考えている(図)。

[1]の軸における受動態は、ツット¹⁸⁾のいう受動化としての(あるいは「ひとつの“Blick”の争奪」における)注察妄想である。

[2]における受動態は、妄想他者の作為によって「見せられる」のであればさせられ体験と関連し、感覚刺激、感覚所与(sense datum)と関連のないものが呈示される場合には幻視と関連してくる事態である。

(ツットのいう「話す(主体が自分の声を他者に向けて放つ)」「聞く(他者が発した声を主体が受け取る)」関係における「話しかけられる」は、[2]軸における受動態に相当する。これに対応するものを視覚領域で敢えて考えるならば、「(他者の視覚に対して)自分の像を現す」—「(他者の像が)自分の視覚に現れる」という関係における幻視となる。もともとツットは、分裂病において幻視が少ないのはなぜかという問題意識から出発しているのだが、分裂病の幻視は従来考えられていたほど稀なものではないらしい¹⁹⁾。)

[1]と[2]はともに、主体と他者との関係における能動—受動である。

[3]はこれらとはちがって、前項で知覚変容において認めたように、感覚刺激(“Bild”や“Laut”)の帰属をめぐる知覚対象と主体との争奪戦の軸である。言い換えると、様々な感覚刺激のなかから主体が能動的にあるものを選択・同定するのか、感覚刺激が主体にとって不可避なものとして主体めがけて飛び込んでいくのか、という様相の軸である。図中には日本語の「見る」に類する動詞を思いつくままに並べたが、この軸は前二者とは異なり、能動—受動間で連続的な“スペクトル”を形成している。視知覚変容で訴えられ

るのは、この軸において受動の極に近いと定位される「目にはいる」「目に飛び込んでくる」という体験である(ちなみに両極間の中にある「見える」は西洋古典語において能動相—受動相の間で「中動相」と呼ばれるものにあたるだろう¹⁰⁾、

この観点からすると、山田らは視知覚変容を正しく[1]から区別したものの、[2]と[3]との区別を意識していない。ツットの「無名的他者に「話しかけられること(Angesprochen werden)」に対応するものとして「顕わす(sich zeigen)」を考えるとすると、それは[2]軸における受動化の病理である。一方、「“Bild”の争奪」は端的に[3]軸における事態である。そこに段階的・経時的移行があり得るにせよ、ここでも前節同様、両者を区別することの必要性和有用性を指摘したい。

③視知覚変容における「本質属性の顕現」について

山田らは、“sich zeigen”を「対象が、主体の意図に従ってではなく、それ自身を、己れ自身の様々な属性において自在に顕すこと」と言い換えて、視知覚変容の体験様式であるとしている。ここまでは筆者にも異論はない。

問題とすべきは、続く部分で山田らが、「対象が、主体の意図に従ってではなく、それ自身を、己れ自身の様々な属性において自在に顕すこと」をマトゥセック^{8,9)}が述べた「本質属性の顕現」と同値としていることである。

山田らの症例の「現象学的記述」部分には、「本質属性の顕現」としてとらえ得るものも含まれてはいる。しかし、そのみでは“すくいきれない”視知覚変容体験が多いことも事実である。例えば、「自分の視野が広い、みんな見えちゃう」(症例4)、「自分の手を見ていても自分の手じゃ

ないような感じになるんです、周りのものと一緒くたになるんです」(症例9)、「先生の顔が片っ方だけ変にクッキリ見える」(症例13)等の訴えにおいては「本質属性の顕現」との関連が明確でない。また、「眼に飛び込んでくるように、刺さってくるように見える」(症例1, 9, 10, 12, 13)という訴えでは、「飛び込んでくる」のは本質属性にかかわらず無限定・不特定なもののように思われる。

マトゥセックも、「これ(本質属性の顕著な出現)だけで外界で体験された妄想を説明することは許されない⁸⁾(邦訳書 p. 50)として、知覚界の著明な変容として他に「自然の知覚連関の弛緩」「知覚の硬直」「枠にはめられた本質属性」を挙げている。山田らも別段で「知覚連関の弛緩」「知覚の硬直」を視知覚変容に見いだしている。

「対象が、主体の意図に従ってではなく、それ自身を、己れ自身の様々な属性において自在に顕すこと」は、ひとり「本質属性の顕現」に還元され得るものではない。私見によれば、それはむしろより多く「知覚連関の弛緩」「知覚の硬直」に拠るものである。筆者は、「本質属性の顕現」なき視知覚変容は多く存在すると考える。このことから、視知覚変容は、妄想知覚からも幻聴の等価物からも段階的の隔絶を経たものであるといえる。

IV. 結 語

以上、山田論文の文献的考察部分について批判的に検討した。そのなかで、

- ・視知覚変容と妄想知覚の間には相互移行があり得、前者は後者の前段階ないし初期段階である可能性がある。

- ・しかし、視知覚変容は妄想知覚に発展しないことが多く、両者は区別されるべきである。

- ・山田らが視知覚変容からとりだした「“sich zeigen” ということの圧倒性の病理」は、聴覚領域においても認められ、それは幻聴とは異なった病態に対応する。

- ・したがって、視知覚変容は、幻聴に対応する視覚領域における病的体験とはいえない。

- ・視知覚変容においては、「“Bild” の帰属」が

主体と知覚対象の間で争奪されている。これは、幻視とも注察妄想とも異なった次元での“受動態”の病態である。

- ・視知覚変容にとって「本質属性の顕現」は必須要件ではない。という結論を得た。

筆者のみるところ山田らは、「他律性」「眼をひきつけられること」と「他者性」「“見せられる”ということ」との区別に対する態度がやや曖昧である。(視)知覚変容における主体の主観的体験様式は、筆者も示したようにある意味で“受動的”であるが、「他者性(あるいは非自我性)」(中安¹²⁾が全く付与されていない視知覚変容が多く存在する以上、視知覚変容における受動性とはいわば主体の“ひとり相撲”のようなものである。“幻”性のないものをはたして、「幻聴に対応する視覚領域における病的体験」と呼んでいいのかという疑問が、本稿執筆の動機であった。

知覚変容体験は、それ自体としてもっと検討されてもよいように思われる。もっとも、山田らが腐心した視知覚変容と妄想知覚との関連についても、今後さらに多くの成果を期待したい。筆者は、例えば中安が「背景思考の聴覚化」論文¹¹⁾で示したような段階的發展論が、視知覚変容と妄想知覚との間においても成立し得ると考えている。

本稿は、山田論文の論旨の一部分を取り出して、筆者なりの批判的検討を加えたものである。ここで取り上げなかった部分については、筆者は全く山田らの見解を支持していることをつけ加えておきたい。知覚変容は(聴覚領域のものも含めて)、位相的な空間図式が保たれた上での知覚構成の不能であるのだが、この困難な題材をみごとに描出した山田らの労苦を多としたい。病期ごとに症候をとらえ、知覚変容症状が分裂病の病態構造そのものに関わるものではないかとされている点には、筆者自身大いに勇気づけられもした。さらに、知覚心理学・認知科学的な視点からの「知覚の硬直」の説明には教えられることが多かった。網膜静止像による視対象の部分的消失と再出現についての論述は、筆者が知覚変容発作を考える上で扱

いあぐねていた問題に新たな活路を示してくれそうである。

互いの研究の今後の進展を祈念しつつ筆をおく。

最後になりましたが、貴重な助言を与えてくださいました神戸大学精神科神経科中井久夫教授と、日頃より上司として共同研究者として御鞭撻いただき今回も御校閲くださった兵庫県立光風病院山口直彦院長に深謝いたします。

文 献

- 1) Brancha, H. S., Wolkowitz, O. M., Lohr, J. B., et al.: High prevalence of visual hallucinations in research subjects with chronic schizophrenia. *Am. J. Psychiatry*, 146; 526-528 (1989)
- 2) Conrad, K.: Die beginnende Schizophrenie. Thieme, Stuttgart (1971) (吉永五郎訳: 精神分裂病, 医学書院, 東京 (1973))
- 3) Huber, G., Gross, G.: Wahn—Eine descriptiv-phänomenologische Untersuchung schizophrener Wahns. Ferdinand Enke, Stuttgart (1977) (木村 定, 池村義明訳: 妄想——分裂病妄想の記述現象学的研究——, 金剛出版, 東京 (1983))
- 4) 岩井圭司, 山口直彦: 分裂病者の微分回路的認知と知覚変容発作. 日本精神病理学会第 13 回大会抄録集, p. 104-105 (1990)
- 5) 岩井圭司, 山口直彦: 知覚体験における能動性—受動性——知覚変容発作における受動的認知態勢の提唱——. 日本精神病理学会第 15 回大会抄録集, p. 80-81 (1992)
- 6) 岩井圭司: 投稿中
- 7) Jaspers, K.: *Allgemeine Psychopathologie*. Springer, Berlin (1913) (西丸四方訳: 精神病理学原論, みすず書房, 東京 (1971))
- 8) Matussek, P.: Untersuchungen über die Wahrnehmung. 1. Mitteilung. Veränderungen der Wahrnehmungswelt bei beginnendem, primärem Wahn. *Arch. f. Psychiat. u. Z. Neur.*, 189; 279-319 (1952) (伊東昇太, 河合 真, 仲谷 誠訳: 妄想知覚論とその周辺, 金剛出版, 東京, p. 11-72 (1983))
- 9) Matussek, P.: Untersuchungen über die Wahrnehmung. 2. Mitteilung. Die auf einem abnormen Vorrang von Wesenseigenschaften beruhenden Eigentümlichkeit der Wahrnehmung. *Schweiz. Arch. Neur.*, 71; 189-210 (1953) (伊東昇太, 河合 真, 仲谷 誠訳: 妄想知覚論とその周辺, 金剛出版, 東京, p. 73-105 (1983))
- 10) 中井久夫: 私信
- 11) 中安信夫: 背景思考の聴覚化——妄想知覚の形成をめぐって——. 高橋俊彦編: 分裂病の精神病理 15, 東京大学出版会, 東京, p. 197-231 (1986)
- 12) 中安信夫: 内なる「非自我」と外なる「外敵」——分裂病症状に見られる「他者」の起源について——. 湯浅修一編: 分裂病の精神病理と治療 2. 星和書店, 東京, p. 161-189 (1989)
- 13) 佐藤哲哉, 飯田 真: 分裂病の幻視症状について. 高橋俊彦編: 分裂病の精神病理 15, 東京大学出版会, 東京, p. 97-123 (1986)
- 14) Schneider, K.: *Klinische Psychopathologie*. Thieme, Stuttgart (1962) (平井静也, 鹿子木敏範訳: 臨床精神病理学, 文光堂, 東京 (1957))
- 15) 山口直彦, 中井久夫: 分裂病者における「知覚潰乱発作」について. 内沼幸雄編: 分裂病の精神病理 14, 東京大学出版会, 東京, p. 295-314 (1985)
- 16) 山口直彦: 分裂病者の訴える知覚変容を主とする“発作”症状について. *精神科治療学*, 1; 117-125 (1986)
- 17) 山口直彦, 岩井圭司: 抗精神病薬使用中にみられる発作性の知覚変容を中心とする症状群 ①臨床精神病理学的側面から. *精神科治療学*, 6; 129-134 (1991)
- 18) Zutt, J.: *Blick und Stimme—Beitrag zur Grundlegung einer Verstehenden Anthropologie*. Zutt, J.: *Auf dem Weg zu einer anthropologischen Psychiatrie*. Springer, Berlin, S. 389-399 (1963)

——〈1992. 12. 5 受理〉——

〈索引用語: 視知覚変容, 知覚変容発作, 妄想知覚, 精神分裂病〉

〈 **Keywords:** visual perception metamorphosis, perceptual alteration attack, delusional perception, schizophrenia〉